＜縮小社会研究会報告＞（241110）
日本農業は衰弱死するか？
大野和興（農業ジャーナリスト）

１，「戦後期」という発想
・2025 年は戦後 80 年。この間を「農業の戦後期」と位置づけたい。
・戦後を基礎づけた「自作農体制」
　日本人３００万、アジアの人びと 2000 万人を殺したアジア太平洋戦争
　その見返り（日本人民への）としての憲法　と農地解放
　働くものが土地を持つ戦後自作農の誕生と解体の 80 年
　ある戦後体制の終焉

２，戦後自作農の精神史の試み
・名望家と小作農の狭間で
　　政治学者石田雄の分析
　　自民党と社会党が共存した村
・山形県白鷹町の元小作農 92 歳老農の語り
・無着成恭さんの死で考えたこと
　　山びこ学校と江口江一と佐藤籐三郎
　　田んぼをどこまで拡げるか
　　みんなが等しく生きていく
・開発・公害と農民
　　三里塚空港反対を戦ったのは戦後自作農
　　安中公害闘争　大塚紋造と藤巻卓治
・経済成長と金勘定　農業近代化の旗手としての戦後自作農
　　より大きく作り、より多く売る
　　「みんな等しく」からの価値観の転換
・映画『出稼ぎの時代から』を撮って
　　出稼ぎと人買いバス　金がすべての世の中に
　　みんな怒らなくなり、諦めが漂う村
　　年金が最大の収入

３，農業技術　文化　生き方
・「よく出来た、というな、よく作った、といえ」山下惣一のつぶやき

・保温折衷苗代　農業技術者と農民が組んで
・山地酪農と水田酪農
　高知の岡崎さん、秋田の高橋良蔵さん
・農業近代化というイデオロギー
　より多く、より早く、より強く
・ＡＩと自動化と有機農業
・官の技術、民の技術、資本の技術
『百姓伝記』を読み返す

４，多財布化と家族の解体、女性の自立
・家族農業という神話またはカルト
家族の解体と農村女性の自立は併行して進んだ
　収入の多元化―女が外へ―みんなが財布を持った―家長の弱体
・農業にだけなぜ「家族」を強調するのか
「家族」は最後の共同体というが、いまや「憎しみの共同体」
家族農業を支えているのは土地の世襲と家父長制の残渣、そしてただ働き
置賜百姓交流会での雑談
それなのになぜ保守はもちろん革新も、農民運動体も（家族農業をもっとも推奨するのは農民連）家族農業こそ導きの星化するのか
絶対主義天皇制に乗っとられた農本主義との類似性　自立意識の欠如

５，さて、どうするか
　　戦後期の次の来るものは、新しい戦前か

・勢いがいいのは政府だけ
改正基本法が打つ出したこれから
＝農業の先端産業化
①農地所有・利用の規制緩和をいっそう進めて、農外資本を農業生産の主体に組み込み、巨大経営体をつくる。
②農産物価格は需給と品質に応じて市場で決める。
③AI と生命科学によるイノベーションで生産性を上げ、巨大経営体の生産を支える。
ここにはもはや独立自営の自作農は存在する余地はありません。こうなると、単に農業の問題ではなくなります。社会全体のありようや経済の仕組み方を作

り直す動きを、それぞれの場で始めるしかないだろうと思っています。

・農民経営の上向発展は限界に
　秋田、山形、新潟の村で
・農業の資本主義化の道筋はあるか
・新基本法がいう「多様な農業」とは「農業の日雇い化（日傭取り）」あるいは農民の「フリーランサー化」ではないのか
（改正基本法 26 条２「望ましい農業構造の確立」「効率的かつ安定的な農業経営を営む者及びそれ以外の多様な農業者により農業生産活動が行われる・・・」）
　農業と村の貧困化現象と捉えるべき
　かつては農民の困民化のなかで世直し一　　揆（幕末）や秩父暴動が起こったが、今はせいぜいフリーランス強盗
・地域・文化と農業
　日傭取り経済から村や文化は生まれない
・文化なき農業に意味はあるか
　文化を生むのは余剰（須藤克三さん）
・地域の消失
　地域なき農業は可能か
　山形「地下水」を生んだ真壁仁の思想から
　　斉藤太吉、星寛治、木村迪夫ら
　　山下文学をどう読むか
　　星寛治の「文化としての有機農業」
　　上越有機農業研究会による上越農業映　　画祭
・境界を越える
　都市と農村
　　都市問題は農業問題であり、農業問題　　は都市問題である
　　都市も農村も行き詰まっている
　　都市を耕す　香港、バンコク、ロサンゼルスから
　脱国境　クルド自給農園の試み

参考
追悼　星寛治さんがいなくなった　大野和興
　　日本の有機農業運動を作り上げてきた大先達、星寛治さんが死んだ。星さんの死の 2 週間前の 23 年 11 月 25 日、日本の有機農業運動を、そのはじまりから現在まで主導してきた高畠町有機農業

五〇周年を祝う催しが開かれたばかりだった。星さんが基調講演をするはずだった。聞くと体調がよくないということで、中央から来た学者先生がメインのシンポジウムに切り替えられた舞台を、会場のひと隅でみながらさみしさをかみしめていた。

星さんは有機農業とは何かを考えるうえで、独特の存在感を放っている。それは有機農業を文化として捉えるという視点である。筆者が星さんと始めて会ったのは一九七二年だった。地域の農業青年が星さんをかついで高畠町有機農業研究会を立ち上げる一年前である。置賜で山形農民大学が開かれるという情報が入った。詩人で地域問題、農業問題、教育問題で鋭い問題提起をしている土着の知識人真壁仁が主導する山形農民大学には、ものを書き考え実践する農村青年が集まっていた。これは行かねばと列車に飛び乗り、その会場で出会ったのが星さんだった。出たばかりの星さんの第一詩集が置かれていた。

凝縮された言葉の強さに惹かれ、詩集を購入した。手元に星さんが書かれた本が何冊かある。その中の一冊『有機農業の力』（創森社 2000 年刊）を手にとってみた。日々の土とのふれあい、農作業を通して感じる季節感、自然と人間の相対し方、といった農民の日常が見事に自然哲学として論理化され、言葉として紡ぎ出されている。ここに星寛治さんの有機農業論の真骨頂を読み取ることができる。　最後に付け加えると、星さんは有機農業を語るとき、恒に平和に言及した。星さんら山形の青年たちの人間形成に大きな影響を与えたものに青年団運動がある。「平和と民主主義」はその核心の一つだった。「彼は六〇年安保反対デモに高畠からでかけた」と同年代を農民として共に生きた山びこ学校の佐藤藤三郎さんはふりかえっている。（農民新聞）

対談：山下惣一大野和興『百姓が時代を作る』（七ツ森書簡 2004 年）
大野和興・置賜百姓交流会編『百姓は越境する』社会評論社 1991 年）
大野和興・西沢江美子著『食大乱の時代』七ツ森書簡